
ロボスの娘で行ってみよう！

三田弾正

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロボスの娘で行ってみよう！

【Nコード】

N9323Z

【作者名】

三田弾正

【あらすじ】

銀河英雄伝説の同盟側で書いてみたいという気持ちで、書いたのですが、

他の2つが忙しいので取りあえず書いた感じですが、

ロボス元帥の娘になってみようと言う感じの物語です。

第1話 銀英伝へこんにちは(前書き)

なんか、書きたくなっただけど、
続くかは不明です。

第1話 銀英伝へこんにちは

ある日、メゾネットタイプマンションで、38歳独身OLがOV
A銀英伝を見ながらラインハルトやヤン批判をしながら酒飲んでく
だを巻いていた。

「やっぱ、クソ餓鬼は嫌だね。ヤンも甘ちゃんだけどさ未だマシだ
よね」

先ほどから10本目のチューハイを開け飲み始めた。

「プファー旨いねー、梅酒サワー最高！」

「大体ヤンもヤンだよな。イゼルローン要塞取るんじゃないで壊し
てしまえば良いのになー！」

支離滅裂な言動である。

「ウゲー、気持ちわるートイレトイレ」

そのままトイレに吐きに行く途中階段から足を滑らした彼女はそ
のまま頭部を強打し、

自分が死んだことも気づかずに、あの世へと旅立ったのである。

んー痛たたた。真っ暗じゃん今何時だ？

ん？腕時計が無いな。どっかへ落としたっけ？

ん？目が慣れてきたな。はあ？何だこの手はスゲー小さいぞ、まる
で子供の手じゃん！

おっ電気が付いたけど、ここ家だよな誰か来るじゃん、泥棒かよ！
まじーぞ、動けないんだよー。縛られたか！

犯される！！声を出そうとするんだが、叫び声しかでねーぞ！

出川哲朗じゃないけど。やばいよやばいよ！！

「あらあら、リーファちゃん起きたのかしら？」
「はっ？英語かよしかも女の強盗かい！」
「女が近づいてくる、しかもでかい巨人だ！」
「ゼントラルデー人程じゃないが十分な巨人だ。」

巨人の強盗って何なんだよ！

「リーファちゃん、おしめを替えましょうね」
「脱がせられる、?????んちよと待て落ち着こう。」

今の状態は巨人に抱かれて居る。

体を見よう、???????

あ”！小さいじゃんか。赤ん坊の体だけ！！

夢ですかね、夢ですね。飲み過ぎで眠ってるんだな、じゃあ又寝ようお休みなさいー！！

「あらあら、リーファちゃん気持ちよくて眠っちゃたわね」

リーファです、15歳になりました。いやはや夢だと思っていた赤ん坊の時期が懐かしいですね。

まさか死んでるか、意識不明か判りませんが、変な世界へ転生したみたいなんですよね。

転生ですよ2次小説に良くあるやつですが、神様が出てチートくれるとかは全く無し何なのか不明ですよ。

ある程度判るようになったのが5歳を越えた辺りからで、

この世界が宇宙暦を使う世界で同盟軍だとか帝国軍だとかの世界と

聞いた時は、

銀英伝だと思いましたよ。

調べてみるとまさに銀河英雄伝説の世界でした。

私は、自由惑星同盟に生まれたわけでした。

帝国ならラインハルトを排除してイケイケドンドン出来るかも知れないけど、

同盟じゃねー、先行き不安じゃないですか！

生まれた年は宇宙暦768年7月22日なんですけどね。

これってヤンとアッテンボローの丁度中間なんですよ。

それは良いんですが、両親がというか、父親が問題でしたよ。

「おーい、リーファ。そろそろ出かけんと士官学校の入学式に遅刻するぞ」

「はい。お父様」

「うむ、お前も士官学校へ入るのなら、トップを目指せ。

我がロボス家の誇りになるのだ！」

「はい」

「では向かうとするか」

そうなんですよ、私の名前は、リーファ・ロボス。後の宇宙艦隊司令長官ロボス元帥の娘として生まれてしまったんです。

あー、キャゼル又先輩か、グリーンヒル大将の子に生まれたかった。嘆いてもしようがないので、何とかしようと思いましたが士官学校へ行くことに成ってしまったのでした。

取りあえず、銀英伝の世界へ来たときから、覚えている限りの原作知識を書き写しておきましたよ、いつか役に立つんじゃないかと思っただけね。

士官学校の試験に役立つとは思いませんでしたけどね。

入学式は滞りなく終わりましたよ。
シトレ校長の訓辞も全然長くないですから、考えるにヤンの超短いスピーチの原点かも知れませんか。
ヤンとかラップとかワイドボーンを見つけようとしても判らないですね。

入学試験で4880人中4番だったそうなのですが、
そんなに難しい試験はじゃ無かったんだけど、
前世で21の時受けた海上自衛隊の幹部候補生テストより簡単だったんだけどね。

無論受かりましたよ、けどね30歳の時セクハラされて辞めたんだよね。

くそー！今でも頭に来る！！

今度しやがったら、只じゃおかねーぞ！！

まあロボスの娘にちよっかい出す奴は居ないだろうけどね。

まあ4年間ゆるゆるとやりますか。

まずは人脈づくりだね。

ヤンとラップに会いにいけたらいいこと。

第2話 士官学校の日々（前書き）

ヤンやアツテンボローやラップやキャゼル又と知り合います。

第2話 士官学校の日々

宇宙暦785年7月

士官学校に入学してから、既に1年経ち座学に実技とやって来ましたが。

苦手な科目がある事が判明しました。

それは戦闘艇操縦訓練、シミュレーションなんですけど、

前世から3D戦闘とかが超苦手で、航空戦とかだと目が回るんですよ。

この世界なら大丈夫かと思ったら、気持ち悪くなって内部で吐きましたよ。

前代未聞とまでは行かないが、これで戦闘艇操縦訓練は毎度毎度下呂袋持参に成りました。

結局戦闘艇操縦訓練の成績がなんと赤点ギリギリの56点。ヤンより悪いです。

親父も最初は怒ってましたが、体質的なモノと判ると仕方がないと諦めてくれましたし、

他の教科は軒並み90点越えでしたからそれで相殺してくれました。同期からは、袋の君とか渾名付けられましたけどね。

ワイドボーンは新学期の説明で総代として皆を教えしてくれたので見知りでしたが話すほどでは無いです。

ヤンは戦史科らしいので行ったんですけど居たことは居たんですが余り行くに変な顔されると嫌なので取りあえず遠くから見ているだけにしました。

ラップは何処に居るやら判らないので未だに会ってません。
ジェシカは居ましたけど、それほどお近づきにならない状態ですよ、
何となくですけどね。

親父と校長が25年来のライバルなので校長から何か言われるかと思いましたが、
流石校長ですね、平等に扱ってくれますよ、此が家の親父なら依怙
鼻肩や毛嫌いばかりですからね、
我が親ながら情けないたらありやしない、だからフォークやホーランドの
阿呆を重要視するんですよ。

それで今日は2年になってアッテンボローが入校してくるんです、
楽しみですね。

キャゼル又先輩も今年事務局次長として配属されてきたので人脈造り
をしますよ。
まあ私は戦闘艇操縦訓練が足を引いて、成績が一桁台にならないんですよ。

入校式が行われて入校してくるんですが、説明はクラスヘッドがします
からね、
私は関係ない状態なので、日向ぼっこしながら歴史書読んでます。
暇ですね、太陽が眩しいですね。

どうせこのまま行っても、同盟はラインハルトに潰されるわけ
で、
何とかしようにも、アホ政治屋やアホ参謀達を何とかしないと駄目
なんですよね。
自分が偉くなれるかですけど、女じゃフレデリカみたいにヤンの副
官とかしないと駄目ですからね。

しかもこの世界、150年も戦争しているから、すっかり人的資源が枯渇気味で大変なのです。

人材育成も若年兵を使う時代になっています。

カリンなんか15歳ですよ、そんな子達を使うなんて末期的ですよ。下手な戦闘ばかりして毎年数十万を殺してるんですから。

感覚的に言うと第二次大戦末期のドイツ軍や日本軍状態ですよね。

経済もボロボロですし、資料見れば見るほど頭痛くなりますよ。

士官教育が促成になってないだけ未だマシですが、

戦史研究科が廃止される事態で既にO.U.Tです。

資料を見ていると、ラインハルトが出てこなくてもギリ貧で国が潰れてたんじゃ無いかと思えるです。

ルーティアマト会戦とかヴァンフリートとかは無駄な戦いですからね、

それを止めるだけでかなりの戦死者を減らせるはずなんですよね。

まあこうなれば、親父を利用して宇宙艦隊参謀になって、フォークのアホをパージしなきゃだね。

まあラインハルトを殺せば良いんだけど、

あの金髪チートだらけだらうし運ばかり良くて、死なないんだよね
！。

死なさないで失脚を狙うのが良いんだらうけど無理だよな。

あーどうしたら良いやら、考えよう。

あー、もう夕方か今日は自習だったから大丈夫だらうけど、そろそろ帰らないと駄目だね。

今日はヤンがワイドボーンを破ったのと同じ、戦術コンピューターをつかった、シミュレーション戦闘です。まあ2番煎じなのですがね、弱い相手にはそれなりに。強い相手にはラインハルトや双壁やヤンの戦法を採用していますよ。

U型陣とか、補給線切断だとか、中央突破背面展開とか、ジャンジヤン原作知識で使います。

だってどうせ、実戦なんか親父が許してくれないはずだもん。

後方に置きたがっているのが判るのが、受けた科が兵站科ですからね。

シトレ校長も惜しいと言ってくれてますけどね。

目指せ2代目、キャゼル又と行きますか。

お腹すいたら兵隊は働かないですからね。

日本陸軍のように、輜重兵を馬鹿にした拳げ句に餓死連発の軍隊は駄目ですよ。

親父もグランドカナル事件やったり、帝国領侵攻作戦で補給軽視で失敗してますからね。

この軍隊アホの集まりですか？

大体参謀教育がまともじゃないし、大戦果あげただけで、提督へ昇進とかあり得ないぜ。

だからあんなアホのフォークやホーランドが出てくるんだよね。

おっ私の又番ですな。

今度は負けましたね。結局学年二位でしたよ。まあ良いところでしよう。

けど負けた同期、全然原作に出てこないんだよね、

モブキャラなのかな不明だね。

そうそう、キャゼル又先輩と知り合いになりましたよ。
書類出しに行つて挨拶してきました。

いい人ですよ正しく、私が兵站科だと聞いたら兵站の苦勞を思いつきりお話ししてくれました。

ヤンにも会うことが出来たんですけどね、

ごく普通に話すだけです、自分は784年度10位ですけど、

ヤンは783年度1900番台ですからね、

まあキャゼル又先輩の所へ入り浸つて居るので自然とヤンやラップやアツテンボローとは知り合いになりましたよ。

宇宙暦785年12月

同盟軍士官学校 事務局次長室

「おいアツテンボロー、お前さん怪しげな地下組織を作つたらしいな」

「キャゼル又先輩の薰陶のお陰ですよ」

「ぬかせw」

「まあアツテンボローは反体制派だからね」

「ヤン先輩それは酷いですよ。そうだらップ先輩、良い本がありますよ読んでみませんか」

「ハハ、そうだね」

「おい、アツテンボロー、セクハラ紛いの本だとやばいから、気を

付けるよ」

「大丈夫ですよ、その辺はね」

「何と言っても、ロボス提督のご令嬢が此処へ出入りしているんだから、セクハラで訴えられるぞ」

「リーファ先輩の事ですね、先輩なら大丈夫ですよ。」

何と言っても我らの有害図書愛好会の有力なスポンサーの1人ですからね」

「本当かい、提督が聞いたらアッテンボローお前、宇宙へ素っ裸で放り出されるぞ」

ニヤニヤとキャゼル又が話す。

「そりゃたまらんですな、リーファ先輩には秘密を厳守してもらわなきゃ」

「アハハ、そうだなアッテンボロー、素っ裸で宇宙遊泳はたまらんな」

「ラップ先輩、酷いですよ」

「あら、私の悪口かしら、アッテンボロー」

いきなり入ってくるリーファにアッテンボローがビックリする。

「えーと先輩何時からドアの外に居たんですか？」

「スポンサーの辺りからかしらね」

「じゃあ、お願いします。絶対に言わないで下さい」

「宇宙遊泳見て見たいなっついていたりして」

ニヤニヤ笑うリーファ。

「リーファ大先輩マジ勘弁」

「アッテンボローは女姉妹の末っ子だから女性には弱いんだな」

「ヤン先輩フォローになってないですよそれ」

「いいわ、私も怒られたくないから、黙ってますよ」

「先輩マジ感謝です」

「ヤツとする、リーファ。」

「その代わりに、今度の休日に私とデートしなさい」

「えっ」

「あら、嫌なの？自慢じゃないけど私、士官学校でも5本の指に入ると思うわよ」

「ぼそっとヤンとラップが言い合っている。」

「女傑度はN01だけどね」

「先輩、聞こえてますよ。けど自覚してますから良いですけどね」

「アッテンボロー、男冥利に尽きるじゃないか、精々エスコートして差し上げるよ」

「酷いですよキャゼル又先輩」

「ていうわけで、来週の日曜はどっかへ連れて行きなさい」

「ガツクリする、アッテンボロー。」

「判りました、リーファ先輩」

「判れば宜しい」

「所でリーファなんか用があつたんじゃないのか？」

「あつ忘れてました。今度の射撃訓練で使う実包の補給をお願いしに来たんです」

「ブラスターやビームライフルじゃなく、実包か」

「ええ、その方が撃ちやすいんですよ」

「変わったモノだな、普通反動のない方が撃ちやすいんだがね」

「まあ相性ですね」

「リーファは射撃がうまいからね。私なんかと段違いだ」

「ヤン先輩は射撃は駄目でもシミュレーションでワイドボーン先輩を破ったじゃないですか」

「まあね」

「それは素晴らしいですよ、私は先輩の戦術を参考にしているんですから」

「それでもリーファ独特の戦法も有るじゃないか」

「ええ。古今東西の戦史を読んで、研究してますから」

「流石、校庭の沈黙クイーンですね」

「なんだいそりゃ?」

「校庭の片隅で本読んで集中しているから付いた渾名なんです」

「はは、そりゃいい」

「キャゼル又先輩酷いですよ」

「リーファ戦史を読んでいるのかい」

「ええヤン先輩」

「今度良かったら、本を貸してくれないかい」

「ええ喜んで」

「ありがとう」

昼休みが終わるベルが鳴り始めた。

「おつと時間だぞ、学生は早く授業に戻れ」

「はいー」

「了解です」

「はっ
」

「キャゼル又先輩宜しくです」

「やれやれ、騒がしい連中だ、俺も仕事を始めるか」

第3話 クリスマスで苦しみます(前書き)

アッテンボローが苦しみます。

第3話 クリスマスで苦しみます

宇宙暦785年12月24日

自由惑星同盟首都星ハイネセン テルヌーゼン市

地球時代ではキリストの生誕日の祭りであったこの日も宇宙時代になってもお祭りであることには変わりがなかった、自由惑星同盟では各種民族の集まりであるが上、銀河帝国と比べてクリスマスが大きなイベントとして各地で祝られていた。

また男女のカップルも多く見られ、今日此からの日々を期待して居る者達などが多くいるのであった。

その中に、銀灰色の髪の毛をセミロングに纏めた17歳ぐらいの少女と、もつれた毛糸のような鉄灰色の髪の毛でソバカスが未だ目立つ青年が連れだって歩いていた。

「さああ、ダスティー行くわよー」

「先輩、何処行くんですか？」

「あら、先輩じゃなくて、リーファって呼んでよね」

「リーファ先輩、ディナーって言っても、自分じゃ店をよく知らないですよ」

「ふふふ、そこは任して、良い店を予約してあるから付いて来なさい」

「はあ」

「ダスティーそんなに私が嫌なのかしら？」

「いえ、そう言う訳じゃ無いんですが」

「苦手なんでしょう。だから誘ったんじゃない。少しは女性になれておかないと何れ大変よ」

「さあ着いたわ」

「此処ですか。随分高そうな店ですが」

「ダスティー行くわよ」

アッテンボローはリーファに腕を組まれて連れて行かれる。ボーイにリーファが話しかける。

「予約しているロボスですけど」

「はい、お待ちしておりました、お連れ様は既にお待ちでございます」

「リーファ先輩、自分以外に誰か呼んで居るんですか？」

「会つてのお楽しみよ」

「はあ」

「此方でございます」

「ありがとうございます」

「リーファ遅かったな」

そこにいたのは父親のロボス提督であった。

その隣にはリーファが年を取ったような感じの令夫人がにこやかに座っていて、

その他20代後半のロボス提督によく似た青年が座っていた。

「お父さん、お母さん、お兄さん、久しぶりです」

「リーファ、彼が話してくれた人ね」

「そうよ、お母さん、ダスティー、両親と兄に挨拶して」

アッテンボローは、うげー嵌められたと思ったが退路を絶たれて逃げようがないので腹を括った。

「初めまして、ダスティー・アッテンボローと申します、
本日は御家族の団欒にお邪魔して申し訳ありません」

ロボス大将が値踏みするように、ジロリとアッテンボローを見ている。

「儂がリーファの父のラザール・ロボスだ」

「私はリーファの母のマリーヤ・ロボスよ」

「小官はリーファの兄で同盟軍少佐、シャルル・ロボスです」

アッテンボローは完全にリーファに捕らえられた蝶々の様になっていた。

「まあ座りたまえ」

「はっ」

「所でリーファと付き合い始めてどの位になるのかね？」

「嫌だわお父さん、未だ健全なお付き合いだよ」

「はっ」

「まあまあ、アッテンボローさんも堅くならないで、家族になるかも知れないんですから」

いや家族には成りたくありませんとは、口が裂けても言えない状態である。

普段の伊達と酔狂で生きているのが嘘のように真剣な状態に成っている。

そして思ったリーファ先輩の戦略にやられたと。

食前酒が運ばれてきて、もうOUTだと知り飲むことにした。

「アッテンボロー君は士官学校の後輩らしいが、何故士官学校へ入

ったのかね？」

「お父様、ダステイーのお爺様が730年マフィアと同級生なのよ、それで759年のバタゴニア星域会戦で戦死してその意志を継いで軍人になったのよ」

「ほう、でお爺様のお名前は何といたのですかな？」

ラザールの目が輝き、質問してくる。

アッテンボローは仕方なく答えることにした。

「母方の祖父なのですが。ダステイー・コツパーフィールドと言います」

「おお、あのコツパーフィールド提督のお孫さんか」

途端にロボス提督の機嫌が良くなる。

それ以前は新進気鋭のウィレム・ホーランド中尉とのお見合いを進めてきたのであるが、

アッテンボローの祖父が第2次ティマト会戦で活躍した事を知ると、娘よ良くやったと喜び始めていた。

「コツパーフィールド提督には新米の頃にお仕えしたことがあったな。

良い方だった。そうか君が提督のお孫さんか」

ロボス提督は、しみじみと若い頃を思い出しているのだろう。

「まあまあ、ダステイーさんはお酒はいけるんでしょう」
マリーヤが朗らかに話してくる。

「はあ。嗜むぐらいなら」

するとシャルルがにこやかに酒をついでくれる。

「じゃあ飲んでくれ、妹を宜しく頼むよ」

考え込んできた、ラザールが真面目な顔をしてアッテンボローへ話しかけて来た。

「アッテンボロー君。私が言うのも何だが、娘は良い子だと思う。此からも宜しくおねがいするよ。今度ご両親の元へお伺いしなければ成らないな」

慌て出すアッテンボロー。

「いえ、未だ両親には知らせていませんので、何れまたの機会に」
なんとか、誤魔化そうとしまくる。

「もう、ダステイーったら、恥ずかしがっちゃって」

リーファは知ってて、態とシナを作る。

「ダステイーさん、家族と思って家にも遊びに来て下さいね」

「アッテンボロー君。君のような青年がリーファの婿になってくれるのは嬉しい事だ、頼むよ」

ぐわー、リーファ先輩、規定の範囲ですか！

「お父さん、未だ私たち学生だし未成年よ、ダステイーが卒業するまで待つてあげてね」

「そうですね、貴方気が早すぎますよ」

アッテンボローは、お母さん、フォローありがとうございますと心の中で拝んでいた。

「うむ、アッテンボロー君、君の卒業直前にまた話し合おう、宜しく頼むよ」

「そうよお父様、卒業後にしましょうね」

その後次々に出される料理を食べたが、あまり味を覚えて居ないアッテンボローは、

ロボス夫妻と別れて、シャルルの車で士官学校寮まで送り届けて貰った。

「兄さん、ありがとうね」

「ああ、またな」

車が見えなくなると、リーファが笑い出した。

「フフフフ、ダスティー御苦労様」

「先輩、酷いですよ」

「まあ此でお見合い話も潰れたから、OKね」

「お見合いですか」

「そうなのよ。ウィレム・ホーランド中尉とか言う自意識過剰な勘違い男が相手でさうんざりしていたんだよね」

「それで、ダミーが俺ですが、酷いな」

「あら、8割以上は本気よ」

「先輩冗談はよしましょうね」

「女が冗談でこんな事言うと思うの」

「マジ勘弁」

「逃がさないわよ」

「先輩酔っぱらってるんですよ、正気に戻って下さいー」

「逃げるな!」

アッテンボローは遂に壁に追い詰められた。

リーファがアッテンボローの肩を押さえて、いきなりキスしてきた。

「んー」

「ん^」

「プファー」

目がパチクリするアツテンボロー。

「ダスティー、ご馳走様。因みに私のファーストキッスだから」
そう言つて、リーファは颯爽と寮へと入つていった。

残されたアツテンボローは呆然としながら、

押し付けられた柔らかな胸の感覚と唇の柔らかさに戸惑っていたのであった。

第3話 クリスマスで苦しみます（後書き）

ロボスの階級が微妙なので大将から提督へ呼び方を変えました。

第4話 アッテンボローの受難（前書き）

話数をアラビア数字に変えました、他の執筆と紛らわしくなるからです。

ロボスの階級が曖昧なので大将から提督へ変更しました。
アッテン爺さんも提督へ変更しました。

第4話 アッテンボローの受難

宇宙暦786年1月

この所士官学校ではある噂が流れていた。

所謂、士官学校始まって以来の才媛であり女傑である、リーファ・ロボスに関する噂である。どちらかが優れた人物は今までも居たが、2つも持っている凶悪な人物は彼女だけで、その為に士官学校始まって以来と言う枕詞がついているのである。

その、リーファ・ロボス候補生のお見合いの話と、クリスマスに、ある候補生を両親に紹介したという話があったという間に流れまくった。

そんなこんなで、お馴染みの事務局次長室では、アッテンボローがキャゼルヌ達にからかわれていた。

「よつ未来の元帥閣下」

「元帥とまで行かなくても此で艦隊司令官までは確実だな」

「私もジェシカと、ゲフンゲフン」

上から、ラップ、キャゼルヌ、ヤンのチャチャである。

「なんで知ってるんですか？それに何も、やましいことはしてないですよ」

アッテンボローは、キスはしたが、それは無理矢理だったからと理論武装する。

「それはそれ、あのコッパーフールド提督の孫とロボス提督の令嬢が婚約したって話は、統合作戦本部から宇宙艦隊まで、軍全体で

噂になつてるぞ。

783年度士官学校首席卒業、新進気鋭のウィレム・ホーランド中尉を破った候補生だとな」

「何ですか、その噂と広がりには」

「何でも、ロボス提督が嬉しそうに喋りまくってるそうだとぞ」

「リーファも大胆だね」

「そうだね」

「キャゼル又先輩、ラップ先輩、ヤン先輩、面白がらないで下さいよ」

ほとほと困った顔のアッテンボローである。

「大体ライバルの校長を酒に誘って奢った上に、家の婿を宜しく頼むって言ったそうだからな」

「マジですか」

「アッテンボロー、外堀が完全に埋められたね」

「もう両親にも伝わってるんじゃないか？」

「しかし、リーファは策士だな。

惜しいのは、あの素晴らしい戦略戦術眼を碌でも無い事にしか使わない事だがね」

笑い出すキャゼル又、ヤン、ラップと慌てているアッテンボローであった。

事実、士官学校だけでなく、宇宙艦隊司令本部でも噂が流れっ放しであった。

「知ってる？ロボス提督の令嬢が婚約したって話」

「知ってるわよ、士官学校始まって以来の人物だって」
「相手は、コッパーフールド提督のお孫さんだって」

「へーやっぱエリートはエリートにつくのね」

「同じエリートでも、あの人は、自意識過剰なものね」

「そうだよね、敬遠するよね」

「フフフ」

そう言う噂話の流れの中、1人面白くなく歩いている男が居た。

彼の名は、ウィレム・ホーランド中尉、所謂リーファの見合い相手である。

彼としては軍内部でも実力があるロボス提督との？がりが持てるという算段からリーファの婿になる気があったのだが、その前に破談にされた為に非常に頭に來ていたのである。

自分が優れた人間であるのに、単なる第二次ティアマト会戦で活躍しただけの、

人間の孫にかつ攫われたのであるから、怒り心頭であった。

くっそー。ロボスめ！俺のことを目をかけてるとか言って、

娘婿に成るかとか言いながらそれを反古にしゃがって！あーむかつく！！

この俺こそ、帝国を滅ぼす男！ウィレム・ホーランド元帥なのに！

俺が統合作戦本部長と宇宙艦隊司令長官になった暁には目にモノ見せてやるぞ！！

あはあははは、オーディンを長駆し皇帝を処刑するのは、この俺だ！！

コッパーフールドの孫が下に来たら、特攻させてやるか。
いや、俺が元帥になり優雅な生活を送る中で、最果ての駐屯地で惨
めな飼育殺しの方が、

一生後悔するだろうから其方にしよう、はははは、何にしても楽し
みだ！！

気の毒なことに、アッテンボローは、ホーランドに一方的な敵視を
されたのだった。

その原因を作った、当の本人は相変わらず、
校庭の隅で読書しながら、考え事をしていた。

んー、カリンが一昨年生まれただけだから、母親が亡くなるのが
何時なんだろうか、

出来れば事故に遭わないようにしてあげたいんだけどな。

シェーンコップは今年ローゼンリッター小隊長任官か、今の内に？
がりを作っておくかな。

791年にはリユーネブルクが亡命するけど、信頼関係作って於い
て此方の戦力にならないかな。

あとは、艦隊運動のフィッシャーのオツさんにビュコック爺さんと
かゲリラ戦のビューフォートとかに教えを請えれば良いのだけどね。

卒論で、並行追撃と無人艦突撃とD線上のワルツと死角からのミサ
イル艦攻撃とかの利点と欠点を事細かく書いてだそうかな、そうす
れば、下手な人死にが減るからな。

ヤンのイゼルローン奪還方法を出すと、占領できるんだけどな。

問題は帝国領侵攻作戦が始まるかも知れないことなんだよな。

まあ、今の状態だと同盟の戦力は充実してるし、

ラインハルトも未だに軍にいないから成功する確率が高いんだけどね。

或いは791年7月頃に攻略すれば、ラインハルトとキルヒアイスをカプチュランカで捕虜にすることが出来るんだけど、或いは793年に占領すれば、ロイエンタールとミッターマイヤーを捕虜に出来るんだが難しいかな。

問題はローゼンリッターなんだよな。シェーンコップは信頼出来るんだけど、

それ以前の指揮官が裏切るかも知れないからな。

12人中半数が裏切ってるからな。

そうになると、ヤンが落とすまで待つしかないが、サンフォードやウインザーがうざいし、

親父も馬鹿だし、フォークが一番厄介だ、

士官学校在校中に精神錯乱起こさせて退校処分にするかな。

仮に帝国領侵攻作戦があつたとしても、私が親父の元に配属させて貰って。

作戦会議でフォークを人事不省にして、作戦を変えれば何とか出来る筋書きは用意してあるんだけどね、

支持率アップすれば良いわけだから、策なんて幾らでもあるじゃない。

まあ、それまで私が生きているか、親父が失脚してなければの話だ

けどね。

今なら、トリユーニヒト暗殺も結構簡単なんだけどね。

あとは地球教が問題か、何とか出来ないかな、カルト集団として取り締められないかな。

ん？時間だ、授業でなきや。

士官学校 教室

「ねえねえ、リーファ」

「ん、なにカズミ？」

此奴はアサクラ・カズミ（E）同期生で仲が良いが、パパラッチだ。学校内で地下新聞作って居る活動家だが、東スポ並のいい加減な記事が多いので校長も苦笑いで許しているぞうだ。

「婚約したって本当？」

「あー、それに近いことはしたけど」

「何をしたのかな？」

「家族との食事に連れてっただけだよ」

「ふむふむ。ではアレはしたのかな？」

「まだまだよ。キスは奪ったけどね」

「おー、スクープじゃん、でお味は？」

「んー、レモンの味じゃ無いのは確かだよー」

「なるなる、では今後の予定は？」

「親父には卒業後と言ってあるよー」

「了解だ、良い記事が書けそうだよ、サンキュー」

「はいはい、授業真面目に受けなさいよ」

「了解だよー」

んーダスティー包囲網が縮まってきたね、親父もやる時にはやるじゃん。

最近益々太ってきたし、親父臭がするんだけどね。

まあ、及第点として評価してあげますよ。

あとは、アツテンパパと姉上達に認めてもらう事が肝心だね。

そうそう、ヤンに貸す本の目録も作らなきゃ駄目だね。

自分で覚えている知識を纏めた自費出版本もあるから、

此はヤンも読んでないからね、良い品になるはずだよ。

キャゼル又先輩に貸した、旧日本軍関係の補給軽視作戦集や通商破壊戦の補足集は受けたからね。

今度は、どんな本を書きますかね。

その頃、事務局次長室では、キャゼル又が真剣にリーファの貸した本を読んでいたそうさ。

第4話 アツテンボローの受難（後書き）

アサクラ・カズミはネギま！？からのゲスト出演です。

第5話 馬鹿が学校にやって来た(前書き)

フオーク参上。

第5話 馬鹿が学校にやって来た

宇宙暦786年7月

同盟軍士官学校では786年度新入生が入校してきた。リーファも3年となり成績も10番をキープしていた為、新入生の手伝いを頼まれ世話をしていた。

「あー面倒くさいー、やる気ねー」

「リーファまあそう言わずに頑張ろう」

「あいあい」

あーーー、そう言えばこの年は馬鹿フォークが入ってくるんだ！
何処フォークに居るんだあの馬鹿！

「ハハ、良いですね私の門出に相応しい快晴の空ですね」

「おい、フォーク何言ってるんだ？」

「天才たる、アンドリユー・フォークが士官学校へ入校した記念に
天も祝福してくれていますな」

うわー、みんな引いてるよ。馬鹿フォークはこの頃から自意識過剰で馬鹿だ
ったのか。

「おい、リーファ。ありやなんだ？」

「阿呆じゃない？」

「まあ、彼処まで行けば馬鹿とか通り越しているよな」

「まあ天才と何とかは紙一重と言っしね」

「そつだな、変なの居るな786年度新入生は」

「784年度生には敵わないんじゃない、我らがリーファが居る限りね」

「フッフ、どの口が言うのかな」

「リーファ元帥閣下のお陰であります」

新入生を見ながら、リーファ達が駄弁りまくっている所へ、気がついたのか馬鹿フォーケがやって来た。

「ロボス提督の御令嬢、リーファ・ロボスさんですね」

「ええそうですね、貴方は？」

「一応知っているが、此処は知らない振りをして。」

「おーお噂道理にお美しいですな、私アドリユー・フォーケと申します、

お父上のご高名は幼年学校でも有名でございます。

御令嬢たる、リーファ様と今日この時にお会い出来るとは感嘆の極みでございます、

此からの2年間宜しくご教授と、お付き合いお願い致します」

「はあ？何言ってるんだこの馬鹿フォーケ、此処まで頭のネジがすっ飛んでいる奴とは思わなかった。」

「まあ頑張りなさい」

「はは、照れ隠しですな。宜しく願いしますぞ」

式場に行ったが、なんか馬鹿馬鹿しいの。

「ねえ、リーファの知り合い？」

「カズミ。知らねー」

「何なんだろうね、あの新入生は？」

「そこを調べるのが、カズミの仕事だろう？」

「まあね、任しておけ調べてくるよー」
「頑張れや」

さて、校長に頼まれた新入生の案内を再開しますか、仕方ないやい。士官学校のカリキュラムを教えるのは面倒くさい！。まあ仕方が無いから教えようぞよ。

入学式では、士官学校トップ入学のあの馬鹿フォーケが総代とは世も未だね。確か2番手がスーン・スールズカリッターフォーケだったよな。彼の方がよほど優秀なのに何故あの馬鹿フォーケが主席なんだ。

戦時中にも関わらず。同盟の士官教育つて旧大日本帝国陸軍の幼年学校から士官学校そして陸軍大学へ向かう、教育形態によく似てるな。旧大日本帝国海軍の様に完全なハンモックナンバーでその後が決まるし、参謀は平面でしか作戦を立てられないし、補給軽視だし、行き当たりばったり作戦だし、教育方法を考え直すべきだけどね、今はどうにもならない状態だね。校長ですら直せないんじゃないかどうにもならないかね。

それから、馬鹿フォーケがしょっちゅうちょっかい出してきたので、適当にあしらいながら、過ロボスごしまくりですが余りにしつこいので、親父ロボスにチクリに來ています。無論ダスティーも引つ張つてきましたよ。

「リーファ先輩、今回は俺関係無いんじゃないんですか？」
「あら、彼女がストーリーカーからの被害を受けてるのに彼氏が何もしないのは問題じゃない」

「未だ引つ張りますか。俺の人生は決まっていますんですか、最近姉達スが先輩を連れて来いとヤンヤヤンヤなんですよ」

「あら、それじゃ早めにご挨拶に行かなければ成らないわね」

「マジ勘弁して下さい」

スゲー嫌そうな顔をするアッテンボロー、よほど姉が苦手なのであろう。

結局はリーファに引つ張られて、アッテンボローはロボス提督夫婦の待つレストランへ連行された。

「リーファ、此処だ」

「お父さん、お母さん、お待たせしました」

「お久しぶりで有ります」

「アッテンボロー君そんな畏まらずに」

「そうですよ、家族なんですから」

アッテンボローはロボス家の立ち位置が、いつの間にやら、家族にランクアップしていた。

頭を抱えたいアッテンボローで有ったが、此処では抱えるわけには行かないので、

にこやかに挨拶をしているのだ。

「はい、宜しくお願いします」

「さあ、座ってくれたまえ」

ロボス提督も夫人もにこやかに着席を進めてくる。

「リーファ今日はなんなんだい？」

「アレかしら、いよいよ婚約かしら？」

「おう、それならば、ご両親に早くご挨拶に行かねば、不義理になつてしまう」

「あー父さん母さん、未だ未だだよ」

「んではどうしたんだね？」

「いやね、私今ストーリーカーに悩まされて居てさ」

話を聞いたロボス提督が眉間に皺を出しはじめた。

「なんだと、リーファを狙う奴が居るのか！」

「まあ、貴方落ち着いて」

「で何処の何奴なんだ！軍の関係者か？学校の生徒か？」

ロボス提督は湯気を出しそうな勢いで聞き出す。

「今年入った新生で、アンドリユー・フォークとか言う奴なんだけど」

「なに、新生生だと！リーファをストーキングするとは、おこがましいわー！」

「まあまあ貴方落ち着いて」

「此が落ち着いて居られるか」

「リーファちゃん、なんでストーキングされるようになったの？」

「母さん、実は」

『天才たる、アンドリユー・フォークが士官学校へ入校した記念に
天も祝福してくれていますな』

『おーお噂道理にお美しいですな、私アドリユー・フォークと申します、

お父上のご高名は幼年学校でも有名でございます。

御令嬢たる、リーファ様と今日この時にお会い出来るとは感嘆の極みでございます、

此からの2年間宜しくご教授と、お付き合いお願い致します』

「て言う感じで、父さんの権力狙いなのはバレバレなんだよね、

どうやら幼年学校から士官学校へストレートで入学して軍の勉強ばかりで社会性とか適応性とか社会通念とかを忘れてきたみたいなんだよね。自分を天才だって言う痛い人物なんですよ。それで居て、ペーパーテストは良い点でだけど、独創性の欠片もない詰め込み型人間なんだよね」

「うむ、リーファを出世の道具に使おうと言うのか許せん、その様な輩は碌な人間にならん。

幾ら天才だと言っても、人の心の機敏が判らん様な人物では使えんな、そのフォークとか言う候補生に対しては儂がシトレに頼んで監視して貰おう。余りに目に余るようなら、シトレならわきまえてくれるだろう」

ふふふ。親父殿此で馬鹿フォークを信用することも無くなるのではないかな、順次修正して馬鹿フォークが出しゃばらない様にしないとだね。しかし、ライバルでもシトレ提督をかつてるんだね、頼もしそうに話してるよ。

「父さん、気を付けてね、父さんの権力にすり寄ってくる有象無象が此から一杯来るはずだからね」

「うむ、そうだな。目先だけの馬鹿共に惑わされぬようにしなければいかんな」

ロボス提督、リーファ、アッテンボローの3人で頷き合つのである。

「さあさあ。真剣なお話は此処までで、お料理を食べましょうよ」

「ああそうだな」

「そうね」

「はい」

「ダスティー君、まあ一杯」

「はっ、頂きます」

「まあまあ、堅くならなくて良いのよ」

ロボス提督は食べながら、フォークの阿呆の事が気になり、士官学校教育のあり方に疑問を持ち始めていた為に、リーファに質問をしてきた。

「リーファ、士官学校で使える生徒は居るのかい？」

「そうね、まずは4年生のヤン・ウエンリー先輩で、成績は1900番台だけど戦略、戦術に柔軟に対処出来る人だよ、次はジャン・ロベール・ラップ先輩700番台だけどヤン先輩に次ぐ戦略戦術眼の持ち主だね。上の方の方は、ペーパーテスト詰め込み型が多いから柔軟さが足りないんだよ。」

良い例が学年主席のマルコム・ワイドボーン先輩だね、10年に一度の天才と言われて、戦略戦術眼は結構あるんだけど柔軟さが足りなくて、シミュレーションでヤン先輩に負けてるからね。」

それに損害がダブルスコアだから、その辺を直せば名将になれる素質はあるよ」

「ふむふむ。昔からリーファの人物眼は確かだからな、ダステイー君も優秀なのだろう」

「ダステイーは成績は1000番台だけど、戦略戦術眼と疑似敗走とかは凄く上手いわよ」

「ほー。中々疑似敗走はそのまま本当の敗走に成りかねんのだが、やはり提督のお孫さんだな」

「はぁありがとございませす」

「まあまあ。食べて食べて」

食事の時間はあっという間に過ぎ、帰寮の時間になった為、2人して挨拶後帰寮するのであった。

「ダスティー君、今日は楽しかったよ。リーファを宜しく頼むよ」
「はい、誠心誠意いたします」

「リーファ、ストーカーの事は任しておけ」

「ありがとう、父さん」

「ダスティーさん、また会いましょうね」

「はい今日はご馳走様でした」

「いやいや良いと言うモノだよ」

「お父様、お母様、それでは戻りますね」

「失礼します」

「気を付けてな」

「気を付けなさいね」

寮に帰ってきて、アツテンボローはまたキスをされて、戸惑うのであった。

けど段々それが癖に成りつつあるのであるが、本人は未だ気がついていない状態であった。

第6話 卒業式の和解（前書き）

ワイドボーン矯正。

第6話 卒業式の和解

宇宙暦787年6月30日

自由惑星同盟首都星ハイネセン テルヌーゼン市 同盟軍士官学校

初夏の青空の中、第783年度士官学校生の卒業式が執り行われていた。

主席は10年に一人の逸材として名を馳せた。マルコム・ワイドボーンであった。

彼は2年時のシミュレーションで、自分より遙かに成績下のヤン・ウエンリーに破れたことを長い間まぐれであり正攻法で来ない卑怯な手と思っていた。

しかし昨年より始まった全校生徒による、応用を持つてするシミュレーションで、

ヤンだけでなく、3年生のリーファ・ロボスや2年生のダステイ・アッテンボローに次々に破れ、考えを変えていた、所謂戦場では常識的に敵動くわけがないと、

それが判った後は、持ち前の戦略戦術眼での確な指揮が執れるようになり、

シミュレーションでも好成績をあげられる様になった。

考えが変わった為に、人付き合いも良くなり同級生は元より下級生にも優しい先輩として慕われることになった。ワイドボーンが後に士官学校の最終学年が自分の人格構成に多大なる影響を与えたと語った事はワイドボーン語録に記録されている。

ヤン・ウェンリーは本人の好む好まないに関わらず、ワイドボーンを破ったと言う実績を買われ、同級生や下級生に対して戦術での突発的な事態や奇策を臨時講師として教えてくれるようにと校長に頼まれ渋々請け負い教えることになっていたのである。

その為、同級生は元より下級生からの信頼も厚くなり、校長以外の教官からも信頼を得ることになった。

シトレ校長は最初からヤンを買って居たからこそ任せたのである。

結果ヤンは、原作では卒業時の席次は4840名中1909番であったが、

この戦略戦術の評価により、4840名中983番に1000番近くランクUPしたのである。

新戦略戦術シミュレーションはリーファの話聞いた、ロボス提督がシトレ校長と話し合い、自分たちの出来る範囲での士官教育の変更を行った結果であった。

「ヤン先輩、ラップ先輩、卒業おめでとうございます」

「ラップ先輩は違いますが。ヤン先輩も卒業できるんですね」

「ラップ、ヤン、卒業おめでとう、ヤン教育者としてのお前を見たかったんだがな」

「ラップ、ヤン、卒業おめでとう」

「ロジエシカ、リーファ、アッテンボロー、キャゼル又先輩、ありがとう」

みんなの心からの祝福に嬉しがる2人である。

そこへワイドボーンがやって来たのである。

「ヤン」

「ワイドボーン」

喧嘩でもしに来たのかと思うがそれは勘違いであった。

「ヤン、俺はお前に負けた時まぐれだ、汚い戦法だと思っただが、それが間違いだと判った。お前の戦法は凄く勉強になった。すまなかつた」

頭を下げるワイドボーンに慌てるヤン。

「ワイドボーン、そんな頭を上げてくれ。私は気にしていないし同期じゃないか」

「ヤン、ありがとう」

「ワイドボーン」

がっちり握手する2人を見ている。キャゼルヌ、リーファ、アツテ
ンボロー、ジェシカの横へシトレ校長がやって来て、しみじみと見
ながら話し出す。

「ワイドボーンもヤンもラップも一皮むけて一回り大きくなったな」

「校長」

「貴官達は此から実戦の中へ向かう、今日の事を忘れずに行くこと
だ」

「はっ」「はっ」「はっ」

「校長も前線勤務へ復帰だそうですね」

キャゼルヌが思い出したように話し始めた。

「おめでとうございます」「」「」

「ありがとう、第八艦隊司令官を拝命したよ、後任にはロボス提督
が成ることになっている」

「あ”親父から聞いてないぞ！そんな話」

「リーファ、落ち着け」

「まあ、ロボスも驚かせようとしているのと、娘と義息子の在籍中の学校での立場を考えたんだろう」

「なるほど、あとで親父に詰め寄ってみます」

「ロボス候補生、程々にしてやれよ」

「了解しました、校長」

「アッテンボロー候補生、夫らしくフォローするようにな
ニヤニヤしながら校長が言ってくるので、

からかわれているのが判るアッテンボローであった。

「了解しました、校長先生」

「では私は此で失礼するよ」

「流石校長だな」

「全くですね」

「威厳が違うや」

口々に校長の威厳の凄さを話していく。

「ヤン、卒業式後に飲もう」

「ワイドボーン、お前も大部柔らかくなったな」

「みんなほどじゃ無いけどな」

笑うワイドボーン。

「先輩方、飲むとのお誘いなら、無論奢りですよね」

「ロボス、普通それは先輩が先輩を慰労してくれるモノだと思うが」

「あーら、ワイドボーン先輩は統合作戦本部作戦課へいきなり配属ですよ、

その位の奢りは出来る勤務手当が付きますよ」

「リーファにかかればワイドボーンも形無しだな」

「ヤン先輩も、宇宙艦隊総司令部付きに決まっていますからね」

「おい！それは聞いていないよ、確か先月の内示では統合作戦本部記録統計室だったはずだが？」

「ヤンは知らんと思うが、さるお偉方2名がヤンの見識を買って士官学校教官と宇宙艦隊総司令部へ綱引きを行って、宇宙艦隊総司令部付きに決まったのが先日だからな」

「私は、電話で聞きました」

「本来なら守秘義務違反なんだが、リーファなら仕方が無いわけだな」

「キャゼル又先輩、酷いですよ。折角資料の山に埋もれて過ごせると思つたのに」

「それはそれ、お偉方2名は貴官の見識戦略戦術眼を高く評価していてな、資料室へ放り込むのは勿体ないと言う考えなわけだな、シミュレーションでワイドボーンを破っておいて、それに臨時教官を引きつけておいて、楽をしようとは甘かつたな」

キャゼル又はニヤリと笑い、ヤン以外のみんなも笑い出す。

「酷いな、此なら臨時教官なんか引き受けなければよかつた」

「まあ、むくれなさんな、行きたくても行けない連中が大勢いるんだ、精々頑張ることだ」

「そうですね、今のヤン先輩には自業自得という言葉がピッタリですね」

「アッテンボローそれは酷い」

「ヤン、良いじゃないかハイネセン勤務なんだからな、俺は最前線のエル・ファシル警備艦隊司令部付きだぞ」

「ラップは内地だと思ったんだけどね」

「まあ仕方ないさ」

「ジェシカさん気の毒ですね」

「えっ、未だそこまでは」

「ラップ赤く成ってるぞ」

「ええ、まだそんな」

「ジェシカさん大胆発言ね」

2人して真っ赤になるが、ヤンは浮かない顔であった。

「まあ、みんなでパツと飲もうや」

「お供します先輩」

「行こう」

その話を聞いて、学友達や後輩達が駆けつけ、あっという間に100人を超えた連中が町へ繰り出し、卒業式の夜は更けていったのである。

翌朝シコタマ飲んだ連中が二日酔い悩まされたのは、言うまでもないだろう。

「ウゲー、頭いたいー!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9323z/>

ロボスの娘で行ってみよう！

2012年1月14日01時04分発行